

親鸞教義における二諦説と一異の論理

北村 文雄

〔序論〕

親鸞教義体系の根幹には、往還二種の廻向があり、そのいずれもが他力によるものである。この絶対他力への帰敬は、浄土教成立以來たどってきた発展過程において必然的に到達すべき畢竟の境地とも言える。

本研究は、親鸞教義の中でも往還二種廻向において特に重要な位置を占めると思われる龍樹の「二諦説」と「一異の論理」を中核として論述するものである。親鸞教義においては、「能所」、「真仮」、「隠顕」、「行信」、「仏凡」等の語句、そのほかに「生死即涅槃」等の「即」や「二種深信」の「機法」等における対語関係はすべて「一異の論理」で貫かれていて、そこに「二諦説」も深く関わっているように思われる。この「二諦説」と「一異の論理」が教義の具体的展開においてどのように根づいているかを検証し、それが親鸞の他力思想と結びつくに至った必然性について論証することが本研究の主旨である。

〔本論〕

第一章 「中論」を通して見る龍樹教義

第一節 中観と縁起思想

龍樹の縁起思想はその主著『中論』の中で、「八不」を中心にさまざまな個別的教義を問題にしながら述べられている。これは龍樹が『般若経』の思想を受け継いだものとも言われている。『中論』の書名が示す「中」の思想は即ち「中観」であり、「縁起思想」でもある。「中」は即ち「空」のことであるが、両極端を離れ、とらわれを捨てることである。『中論』においては「因縁生故に無自性、無自性故に空」、「虚妄の相故に空」等と説き、一切の事物は無自性であり、空であると云う。また諸縁の和合により仮設され仮名をもつて言説されていると云う。

第二節 二諦説

龍樹は『中論』『觀四諦品』の中で一切諸法を、世俗諦・第一義諦の二諦によって説いている。

この二諦説における二諦とは、「世俗」と「勝義（第一義）」という二つの真実を指し、この両者は論理的に隔絶する関係にありながら即一性を有するものである。即ち「世俗」は縁起の法により空なる諸縁が仮和合したものであり、その奥には言語・分別を超えた真理「勝義（第一義）」が隠されているということを二諦と云う。

第三節 二諦説の生まれた背景

龍樹の中空思想の中核を為す二諦は、その源流が般若思想の中に求められる。般若波羅蜜は、仏教の最高の徳としての智慧のことである。その智慧の内容は空即ち完全な無執着の実現であり、実体的な考えを徹底的に否定することである。般若思想においては無二智を勝義諦とし、それは彼此・能所等の分別を超えていることを云う。『大智度論』における「四悉檀」には「二諦説」の原型を思わせる所がある。また『大乘起信論』の「心真如」は第一義諦を表す基本形となっている。また「心生滅」は世俗諦の基本形とも云える。

第四節 一異の論

龍樹における「一異の論」は、「一か異か」の問題提起をした後「不二不異」の如く相背反するものの両者を否定することによって世俗的には矛盾的自己同一なるものを超越的融合として認めること

である。

『中論』においても次に挙げる如く多くの場面で詳しく述べられている。

「觀去來品第二」は「去ることと來ること」を考察する章であり、「觀染著品第六」は「食りと食る者」の考察、「觀燃可燃品」は「火と薪」の考察、「觀時品」は「時」の考察、「觀因果品」は「集合」の考察、「觀如來品」は「如來」の考察、「觀涅槃品」は「涅槃」の考察の中で、それぞれ「一異」の論を展開している。

第二章 曇鸞教義

第一節 龍樹・天親の融合

天親から曇鸞への浄土教相承は、菩提流支を仲立ちとして、『論註』という撰述において具現化した。また曇鸞が龍樹を浄土教の初祖として恭敬していたことは『讚阿彌陀仏偈』の文からも窺い知ることができる。龍樹と天親とは、内証は同じであるが、強調した所は空と有との違いがあることを曇鸞は把握していたものと考えられる。また天親も単に「有」だけを強調したのではなく、「空」に偏りがちな当時の時代背景の中で、龍樹の「二諦説」に忠実であったが故に「有」を補ったものとも思われる。『論註』は天親の『浄土論』の註釈したものであるが、それは龍樹所説の中觀思想が基盤となっていることを再認識させようとしたものとも考えられる。

第二節 曇鸞の中空思想・縁起思想

曇鸞の縁起思想は、中観派から天親を経て『論註』の総説分「作願門」における「願生」の義、『讃阿弥陀仏偈』等に「無生」、「如虚空」等の言葉となつて表れている。それは親鸞の和讃等の中に取り入れられている。

第三節 二諦説の展開

『論註』における「二種法身説」は、『願生偈』の「三蔽二十九種」を解釈する上で用いられた言葉であるが、それは「二諦」の曇鸞的展開ともいふべきものである。またそれに付随して、般若思想の影響を受けたと思われる「広略相入」や「一異の論理」が適用されている。

こうして龍樹以来の中空思想・縁起思想における「二諦説」が天親等を経て曇鸞に至つて「二種法身説」として展開されたのである。

第三章 親鸞教義における二諦説と一異の論理

第一節 親鸞教義における能所の諸問題

親鸞教義について談ずる時、しばしば問題にされる「能所」という言葉には複雑で深長な意味構造が潜んでいることに注目したい。

第二節 能詮・所詮の考察

能所の中でも能詮・所詮の二語が、教義解釈の上で常に重要な関

親鸞教義における二諦説と一異の論理

わりを持っている。この「能詮・所詮」は、言語学者ソシュールが提起している「シニフィアン（能記）・シニフィエ（所記）」との類似点が多く、「能詮」はソシュールの「能記」とほぼ同義であり、「所詮」は「所記」とほぼ同義と考えられる。

第三節 親鸞の如来観と人間観

親鸞の如来観は、即ち阿弥陀仏観である。それは「二種深信」を二種一具として捉える親鸞においては、攝取し済度すべき衆生との関わりを以て成立するものである。ここにおいて衆生（人間）を談ずることは欠かせない。

親鸞の阿弥陀仏観は、二種法身説によつて示されている。法性法身たる一実真如は無上仏と呼ばれ、絶対無限のものであるが、衆生を救うため阿弥陀仏となつて世間に示現したと云う。したがつて阿弥陀仏は「久遠実成」であり「従果降因」して法蔵菩薩の願行となつたという論理的展開がある。更には二種法身が不一不異であると理解され、十劫成道の方便法身は、実は無始無終の法性法身と不一不異であることが示されている。

親鸞における「二種深信」の「機の深信」は、常に親鸞自身の愚悪な凡夫性への内省と懺悔を吐露したものであり、それはまたすべての人間に通ずるものとして考えられ、同朋への勧誡でもあつたと受け止められる。

第四節 二種法身と二諦説

二種法身即ち「法性法身」と「方便法身」の釈義は、『大智度論』、『涅槃經』等に多く説かれていた。「二種法身」に拠るものと考えられる。二種法身は、理事不二・性修不二の法身であり、無相の理・性が法性法身で、有相の事・修が方便法身ということになる。ここに二種法身と二諦説との関係線が浮かび上がってくる。

広略相入は二諦説や一異の論理が必須の要件である。この「広」と「略」とは世俗的常識によれば相矛盾し、相入はあり得ないものであるが、二諦説・一異の論理によって「超越的融合」へと止揚され「相入」が成立する。

第五節 行信における所行と能行

親鸞の行信についての基本的な考え方は、『行巻』冒頭に「大行」と「大信」と示されている通りである。それは、行も信も弥陀から廻向されたものだから約仏の「大行」、「大信」であり、「行即信」、「行信不二」である。

称名は弥陀が衆生に本願を信ぜしめる行であり、聞名は弥陀の本願を信じて領受することである。ここに所信の弥陀と能信の衆生とが本願の名号によって値遇し、その不実な心が弥陀の真実心で満たされる。即ち世俗虚妄の衆生が真実からはたらきかける本願を信じ救われゆく所に「二諦」と「一異の論理」が関わっているのである。

第六節 親鸞の現世利益と二諦説

親鸞の説く「現世利益」は、『信巻』末の「現生十益」や「現世利益和讃」等で明かされている通り、「真の信心を獲得した者が現生で得られる利益のこと」を言い、従来の伝統的仏教の概念を打破したものである。これはまたわが国古来の通俗的な「現世利益」と意味内容を異にするものである。現在において「現世利益」と云えば通俗的な用い方が先行し、親鸞所説の「現世利益」は一般的に正しく理解されていない。

『現世利益和讃』は、一切の功德の中で最も優れた念仏を称え、弥陀の本願を信ずることによってこの世の迷いや苦悩の繫縛から解かれ虚妄が招く七難八苦も消滅し、安らかな心が獲られることを説いている。

「天神地祇」は二十九有に属することから、親鸞は二諦説に順じて、信ずることも帰依することもしなかったし、「惡鬼神」は、世俗有に属し、凡人の虚妄の所産であり、単なる妄想に過ぎない。ここに念仏を通して智慧の光明に遇えば、これらの妄想繫縛から解放される。これが現世における大きな利益なのである。

キリスト教で言う「奇跡」は、この「現世利益」に相当するものと考えられるが、その奇跡を起こす「天主」という絶対者を「自然」とは別物として立てている。仏教（真宗）における阿弥陀仏は宇宙の時空を超えた無限の絶対者であり、「自然」と云う。また「自然」そのものが既に人間の思惟を超えた真理であることからす

ると、それを超える「超自然」というものはない。「奇跡」は、仏教で言う「縁起の法を知らない無明の迷い」である。

第七節 三経隠顕

親鸞は「至心・信樂・欲生」を「本願の三心」としたが、『大経』の第十八願には、もともと本願の一心即ち「信樂」だけあって、しかも「信樂する」という動詞である。「至心」はその連用修飾語、「欲生」はその内容である。それを敢えて「三心」とした意図は、一つに「それは三経隠顕を説くための布石」と考えられ、もう一つは「弥陀の願心の眞実性を強調するため、修飾語の至心を格上げしたもの」とも考えられる。

親鸞教義が「二諦説」と「一異の論理」を基本としていることの必然的な顕れが『化身土巻』における「三経隠顕」であると考えられる。隠は所詮で、顕は能詮とも云える。また「二諦説」を用いると、隠が第一義諦で顕が世俗諦とも云える。また両者の中間にある「彰」は顕に対しては所詮、隠に対しては能詮と考えられる。

第八節 親鸞における「仮」の重要性

親鸞教義における「仮」は「眞」が世俗諦となつて世間にあらわれ、「眞」へと導く弥陀の方便である。

このように「仮」を教義上の重要な位置に据えることは、龍樹をはじめとする中観思想、般若思想に見られ、無著・天親の瑜伽唯識

論においても見られたことである。

第四章 眞宗教学史における眞俗二諦論に寄せて

第一節 眞俗二諦と仏法・王法との関係

眞宗において「眞諦・俗諦」が「仏法・王法」に結びついて論じられるようになったのは、古くは覚如・存覚の時代であり、その端を発したのは、『化身土巻』における『末法燈明記』引文に出てくる「法王仁王」、「眞諦俗諦」という言葉である。それは仏法を説く法王と世俗法を以て世を治める仁王（国王）が相依・相資の關係にあることを理想とし、世俗における両者の關係を二元的に捉えるもので、仏教本来の「眞俗二諦」とは言えない。

第二節 覚如・存覚の「仏法・王法」

覚如は、「仏法・王法」や「眞諦・俗諦」という言葉を直接用いていないが、「神祇容認」の立場に立ち、「本地垂迹説」によって、当時の社会における仏教の正当性・優位性を主張し、眞宗の地位を確保しようとした。

存覚は『六要鈔』において、『化巻』の『末法燈明記』引文を釈して「仏法Ⅱ眞諦」、「王法Ⅱ俗諦」であることを容認している。また『破邪顕正抄』の中で「仏法・王法は一双の法」とし、「鳥の兩翼」・「車の兩輪」に喩えて分離不可なることを論じている。この喩えは両者を二元的に捉えるもので仏教本来の意味と異なるものであ

る。

第三節 蓮如の「王法・仏法」

蓮如の王法・仏法観は、『御文章』や『蓮如上人御一代記聞書』の文言によって窺い知ることができる。

これらの文言で共通して云えることは、「王法、仏法、義理」を含む文節が頻出していることである。そしてそれらの前半では「王法をおもてとし本とすること」、後半では「内心には仏法・信心をたくわえること」を勧めている。蓮如のいう「王法・仏法」は教団存続のために大いに功を奏したであろうが、これもまた世俗の域から脱し得ないものである。

第四節 江戸期における「王法・仏法」

江戸幕府の強力な幕藩体制下にあつては、法度の厳しい統制もあり、「王法為本」をおもてに掲げ、幕権に忠誠を誓わない限りは宗教教団として生き残ることは出来なかつたであろう。特に、朱子学が幕府の御用学となり、その仏教批判がますます激しくなつた。真宗の場合には、前期においては排仏論の論理的範疇から外れていたが、後期になって、国学の国粹的神道の立場から、真宗の神祇不拝の教理を非難され、その他多くの問題を抱えていた。こうした切迫に応じて、真宗と儒教や神道との融和論も出る中で、特に「王法為本」の立場を明示して真宗と王法との相依関係を強調する真俗二諦

説が続出し、明治以後の「真俗二諦論」の先駆となつている。

第五節 明治以降の「真俗二諦論」

明治、大正から昭和の戦前に至るまで真宗の教義として取り沙汰されてきた「仏法・王法の真俗二諦」論は、内部に羽溪了諦師や梅原真隆師等の仏教原理に基づいた指摘も抱えながら、国権による厳しい思想統制のもとでは、それらが水面下に付され、放置されてきた。しかし幸いにもそのような仏教原理の伝灯が真宗内部において消し去られずに残っている。昭和の戦後においては民主的社會体制のもと宗教の主体性も取り戻され平成の今日に至っている。真宗が「真俗二諦」を教義の基盤に据えようとするならば、当然のことながら、羽溪師や梅原師の指摘の如く仏教本来の原理に立ち戻つてその見直しを為すべきである。

第六節 今後の真宗への提言

真宗における「真俗二諦論」は仏教の原理に基づくものというよりは現実の世間法のための範囲内で理論化され仏法王法の相対的二元論である。これは龍樹の二諦説とは本質的に異なる所で流用されてきた。仏教においては本来「真」と「俗」は龍樹の説く「二諦説」の意で、般若思想の無二智に基づくものである。こうした見地から、今後の真宗における「真俗二諦」が、宗祖親鸞の教義を支える「二諦説」や「一異の論理」の本質を逸した所で論ぜられることなく、

正義を顕証するための新たな論理の組み立てと展開を念願し期待するものである。

〔結論〕

親鸞教義は、本論で論証してきた如く龍樹の「二諦説」と「一異の論理」を根柢として成り立っている。

親鸞においては、人間は勝義に照らし合わせると、虚偽であり惡な存在であった。その故に勝義たる真実への道は隔絶され、人間の自力では往生も仏の悟りも不可得であった。それには絶対から呼びかける弥陀の本願力に乗じるより外に道がない。即ち弥陀より発願廻向された本願の真心を賜ることが唯一の道である。

親鸞は、「世俗」と「勝義」を「一異の論理」で即一的に見るからこそ「二種深信」が一つの心に同時に在り、また世間的論理では矛盾なるものが超越的融合として成り立っている所に般若の「無二智」が感得され、「本願」を「他力」と呼ぶのである。有相の「世間」、「世俗」はあくまで「仮名」「仮設」であり、しかも「勝義」と別にあるものではない。ここにおいて「仮」を「勝義」より劣る別の世界として分別する考え方は破せられる。

「二諦説」と「一異の論理」はまた親鸞にとつて龍樹の祖意「中道」を承けるものでもあった。即ち「二諦説」において二諦のいずれの辺に偏ることもなく、常に龍樹の説く中道に立って教義の展開に当たった。

以上、親鸞教義における龍樹の「二諦説」と「一異の論理」の重要性について考察してきたが、親鸞の「他力思想」そのものが親鸞自身における「戲論寂滅」であつたとも考えられる。

参考文献

〔江戸期・明治〕

- ・僧鎔『本典一諦録』（真宗叢書八）
- ・僧鎔『信行一念事』（真宗叢書 附卷）
- ・智暹『教行信証文類樹心録』（真宗全書三六）
- ・柔遠『教行信証頂戴録』（真宗叢書七）
- ・法霖『行信之弁』（真宗叢書 附卷）
- ・僧叡『柴門玄話』（真宗叢書 附卷）
- ・深励『註論講苑卷一―一二』（法蔵館S48）
- ・道振『往生論註駁本決』（真宗叢書五）
- ・善讓『易行品閑亭記』（真宗叢書八）
- ・円月『本典仰信録』（真宗叢書七）
- ・義山『教行信証摘解』（真宗叢書八・九）
- ・是山恵覚『往生論註講義』（真宗叢書 別巻）

〔現代〕

- ・『浄土真宗聖典』・『浄土真宗聖典七祖篇』
- ・『親鸞聖人真蹟集成』（法蔵館H17）
- ・池本重臣『親鸞教学の教理史的研究』
- ・石田充之『浄土教理史』（サラー叢書S37）
- ・早島鏡正・大谷光真『浄土論註』（大蔵出版S62）
- ・三枝充恵『中論 上、中、下』（第三文明社S59）
- ・三枝充恵『龍樹・親鸞ノート』（法蔵館H9）
- ・中村 元『龍樹』（講談社H14）

- ・瓜生津隆真「龍樹―空の論理と菩薩の道」(大法輪閣H 16)
- ・丹治昭義「中論釈・明らかなことばII」(関西大学出版部H 18)
- ・稲津紀三「中論と他力信仰」(大東出版社S 10)
- ・山口 益「般若思想史」(法蔵館H 11)
- ・山口 益「空の思想 龍樹から親鸞へ」(大法輪閣H 18)
- ・長尾雅人「中観と唯識」(岩波書店S 53)
- ・堀口東四郎「大乘起信論」(法蔵館H 2)
- ・普賢晃壽「親鸞教学論考」(永田文昌堂H 11)
- ・上田義文「親鸞の思想構造」(春秋社H 5)
- ・桐溪順忍「教行信証に聞く 上、中、下」(教育新潮社H 41)
- ・金子大栄「歎異抄」(岩波文庫S 6)
- ・梯實圓「教行信証の宗教構造」(法蔵館H 14)
- ・西山邦彦「現代親鸞教学の先覚者たち」(法蔵館H 17)
- ・東京大学出版会「言語学」(H 5)
- ・八木 誠「パウロ・親鸞*イエス・禪」(法蔵館H 12)
- ・林 智康「蓮如教学の研究」(永田文昌堂H 10)
- ・武田龍精「親鸞浄土教と西田哲学」(永田文昌堂H 3)
- ・武田龍精「宗教と科学のあいだ」(法蔵館H 15)
- ・R・N・ベラー「日本の近代化と宗教倫理」(未来社S 37)
- ・『真俗二諦観集』(静得庵H 2)
- ・『真宗史料集成』(第六巻・第十三巻)

〔論文〕

- ・岡 亮二「親鸞における信の構造」(龍大真宗学論叢7)
- ・浅井成海「親鸞の現世利益観」(龍大真宗学論叢7)
- ・普賢晃壽「日本浄土教の展開と親鸞教学」(龍大真宗学論叢6)
- ・林 智康「教行信証」と「尊号真像銘文」(龍大真宗学論叢7)
- ・林 智康「教行信証」と「唯信鈔文意」(龍大真宗学論叢6)
- ・信楽峻磨「真宗教団における宗教と政治」(龍大真宗学論叢4)

- ・普賢保之「『行巻』における称名破満釈の位置」(龍谷大学論集第四五六号)
- ・瓜生津隆真「真宗信心の本質と社会性」(教学研究所紀要第四号)一九九五年
- ・瓜生津隆真「真俗二諦考 ―真宗教学の現状と課題―」(北畠教授還暦記念「日本の仏教と文化」)一九九〇年
- ・瓜生津隆真「真宗における信仰と生活 ―真と俗をめぐって―」(中西智海師還暦記念「仏教と人間」)一九九四年
- ・加藤純章「大智度論」の総合的研究― E. ラモット「仏訳大智度論」第四巻・序文」の試訳 二〇〇三年